

平成二十二年 度 中 学 校

国

語

(一 回)

〈注 意〉

- 一、監督^{かんとく}の先生の指示があるまで、中を開けないでください。
- 二、最初に受験番号と氏名を解答用紙の指定欄^{ちん}に記入してください。
- 三、字数指定がある問いでは、句読点・記号なども一字として数えます。
- 四、解答はすべて解答用紙の指定欄に記入してください。
- 五、下敷き・色鉛筆を使用することはできません。
- 六、問題は16ページまで印刷されています。
- 七、試験の「開始」・「終了」は監督の先生の合図に従ってください。
- 八、問題用紙は持ち帰ってもかまいません。

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数指定がある問いでは、句読点・記号なども一字として数えます。)

「前書き」

小学一年生の時、「父さん」を病気で亡くした「渚」は、六年一組の卒業パーティーの出し物に「仮面のピーターパン」伝説をアレンジしたサスペンス映画の制作を計画した。「仮面のピーターパン」に出会うと、その人間がもつとも行きたいと願っている時間に連れて行ってくれるという。

固い結束力を誇る六年一組の男子全員が、小学校最後の思い出に楽しく映画を作っていたある日、仲間の数人が「仮面のピーターパン」を見たと言い出した。不思議に思う「渚」であるが、そんな矢先に、クラスメートの一人「ジーエム」が受験を理由に母親から映画制作への参加禁止を申し渡される。このことがきっかけで、数名の受験組とのいさかいや先生たちからの圧力などが重なり、映画制作は事実上休止となってしまう。

受験が終わったある日、映画制作が中止となるかもしれないという発端を作ったのは自分にあると知った「ジーエム」は、映画制作の再開を果たすために、家を飛び出した。

「これはこれは渚くん、よくぞここまでたどり着いたね。そう、このぼくこそが仮面のピーターパンの正体さ」

しだいに呼吸が落ち着いてきた。今さっきのジーエムの言葉の意味も理解できないまま、ぼくは荒い息とともに問いかけた、

① 「こんなところで、なにしてるんだよ。そんな格好で」

② 「ふうむ、ぼくとしてはきみがどうやって校舎内に侵入したのかのほうに気になるのだがね。ああ岡崎くんがいつしよ

だったということはぼくと同じ抜け道ぬちみちを使ったのか。いやいやまったく、この学校の防犯体制のずさんさといったら実に
*2 噴飯ふんぱんものだね

ジーエムは露骨ろこつに話をそらした。いつもと変わらない口調。受験が終わって以降、二人で帰ったことはなかったから、
ジーエムの声を聞くのは本当に久しぶりだった。その声を聞いたとたん、さんざん心配させたことを責める気持ちも怒おこ
気持ちも、どこかへ消えてなくなってしまった。

「もういいから、いい加減その仮面外したら。なんか話にくいんだけど」

ぼくの質問とは無関係な話を早口で続けるジーエムに、ぼくは苦笑くしやうして言った。するとジーエムはふうむと考えこむし
ぐさをして、

「いや、申し訳ないがそれはお断りしよう。③ 妙な誤解みやうを受けそうだからね」

「誤解？ どういう意味さ」

「だからね、ぼくは不覚ふくにも、ついさつきまでここで熟睡じゆくすいしていたのだよ。今数分前に目が覚めたばかりなんだ。ゆえに
だね」

ジーエムがなにを必死になっているのかわからなかった。ぼくが首をかしげていると、ジーエムはあきらめたようにため
息をついて仮面を脱ぬいだ。仮面の下に現れるジーエムの不機嫌ふきげんそうな表情。その目が、泣きはらしたあとみたいに真っ赤
になっていた。

ぼくは息をのみこんだ。⑤ ジーエムが怒ったように言った、

「渚くん、再度言っておくが目が赤いのは寝起ねおきのせいだ。断じてきみが今現在妄想もうそうしているような理由ではない」
それを聞いて、ぼくは思う。⑥ ジーエムは、意外とこういううそが下手だ。

⑦ が詰つままるという言葉は、きっと今のぼくのような気持ちを言うんだろう。ぼくはジーエムに言った、

「——ありがとう、ジーエム」

「なんだい突然とつぜん礼を言ったりして。調子が狂くるうじゃないか」

相変わらず不機嫌な声で、ジーエムは言った。ぼくはそれ以上、ジーエムの赤い目についてはなにも尋ねないことにし
た。

ぼくは言った、

「それで、さっきの話、ぼくこそが仮面のピーターパンの正体だ、って……」

「うん？ つまり言葉どおりの意味さ。夜な夜な怪人かいじんのふん装みなで皆みなの前に現れてはなぞを振りまいていたのはこのぼくだ
よ。どうだい、なかなか刺激しげき的だったろう？」

ぼくは、とっさに言葉が返せなかった。だって、ジーエムはそんな子供じみたはずらの犯人像とは、一番遠いところに
いたから。

「ジーエムが仮面の怪人って、じゃあ、あの教室の様子が新学期のころに戻もどっていたのもジーエムがやったわけ？」

「そう、あれは絶望的な気持ちになったね。一晩かけてなんとか作業を終えたというのに、だれもあの事件を仮面のピーターパンと結び付けてくれないのだから」

「昨日の夜に、江島先生が校舎内で見かけたのも？」

「ああ、それは違う。それは本物のほうさ」

「本物？」

さらりと言うジーエムに、ぼくは驚いてきき返す。

「そう、本物の仮面のピーターパンさ。ぼくは受験で撮影を抜けて以来、この衣装を着るのは今夜が初めてだよ」

しかしそう言うジーエムの表情は薄ら笑いのままで、本物の怪人が現れたなんて非現実的な話を、本気で言っているようにはとても思えなかった。

「じゃあ、ぼくが見た怪人も——」

「なんだ、きみも見ていたのかね？ それも本物だよ。ぼくがわざわざ正体を見破られそうな相手のところに姿を現すと思うのかい。しかしまったく、きみのところに現れて、ぼくの前には姿を見せないとは」

⑧ どうにもうまくいかないものだね、とジーエムは言った。

冗談めいた軽い口調の中で、その言葉には別の響きがあった。それを聞いて、ぼくはジーエムがどうしてそんなことをしたのか、なんとなくわかってきた。ジーエムはたぶん、みんなを怖がらせようとか、小学校生活の最後に、小説みたい

な魅力的な事件を起こしてみんなの記憶に残そうとか、そういう理由で怪人のまねを始めたんじゃない。

ぼくはいつかのジーエムの言葉を思い出して言った、

「ジーエム、前に言ったよね。みんなが信じたり願ったりすれば、本物の仮面のピーターパンが現れるって。あれは、冗談じゃなかったんだね」

ジーエムは答えなかった。ぼくも黙ってジーエムを見つめた。二人きりの屋上には、風の音しか聞こえなくなった。

きっと、ジーエムもぼくと同じ気持ちだったと思う。中学に進学して、みんなと離ればなれになるのが嫌で、それで仮面のピーターパンに会いたかったんだらう。だから怪人の格好でみんなの前に現れて、みんなに怪人は実在すると思わせようとした。そうすることで、都市伝説の怪人が現実姿を現すと、ジーエムはそう信じたのだ。

ジーエムはやがて大きなため息をつく、「やれやれ、すべてお見通しというわけかい」と苦笑した。

「ジーエム……」

「べつに、そんなことを本気で信じていたわけではないよ。今だって、こんな格好をしたところでなんの意味もないことは理解している。ただそれでもね、⑨ どうにもならないことをどうにかしたくて、なにかをせずにはいられなくて、結局なんともくらないことを始めてしまったというわけさ」

ジーエムは、ぼくに背を向けて続ける、

「渚くん、これはぼくのひとり言だから聞き流してほしいのだがね。最初に出会ったときから、ぼくはきみや岡崎くんと過

「ごす時間を本当に大切に思ってきたんだよ。ぼくはこんな人間だからね、きみたちと会うまではずっと一人だったし、卒業してきみたちと別れれば、また一人になる。だから、ぼくはきみたち二人と、それからうちのクラスの面々との楽しい日々が、ずっと続けばいいのにと、いつまでもこのまま変わらなければいいのにと、柄にもなく思ってしまったんだよ」

ぼくはジーエムに言葉をかけることができなかった。いつまでもこのまま変わらなければいいのに。ジーエムの言葉は、ぼくの言葉だった。

ジーエムはこちらに背中を向けたまま、ふう、と寂しげに息を吐いた。

「だが、すべてしかたがないことさ。残念ながらね」

ジーエムにかける言葉が見つからず、ぼくは黙りこんだ。

そのとき、屋上を強い風が吹き抜けた。ジーエムが身にまとった怪人のマントがぶわっ、と舞い上がり、鮮やかなピンク色の裏地がぼくの瞳に映った。その瞬間、ぼくの脳裏に夢の中での父さんとのやり取りがよみがえってきた。



父さんは、ぼくの髪をそつとなでながら言った、

「そうだね、けど——」

父さんはもう片方の手で、足元の花壇を指差す。まだつぼみの菜の花の花壇。その花壇に向かって、父さんはオーケストラの指揮者みたいに、くるりと手を振るう。それが、魔法の合図だった。

ぼくの視線の先で、菜の花のつぼみがみるみるふくらみ、次々にまぶしい黄色の花が咲き始めた。ぼくは驚いて父さんを振り返った。父さんは再び花壇を指差す。ぼくが視線を戻すと、菜の花の茎や葉のところどころに、小さな緑色の光が灯っていた。よく見れば、その光はすべてちようのサナギだった。深緑色のサナギが光を放ち、その背中がいつせいに割れたかと思うと、中から色とりどりのちようが姿を現し、われ先にとばかりに空へと舞い上がった。

ぼくは声をなくしてその光景を眺めていた。ちようたちは仲間と遊ぶように、軽やかに、ぼくの鼻先を飛び交っている。耳を澄ませばちようの笑い声が聞こえるようだった。

「なにもかもが、変わってしまうわけではないよ」

隣でふいに、父さんのささやき声が聞こえた。ぼくは父さんの顔を見上げた。

「サナギからちようになれば、姿かたちは全然違うものになってしまうけど、サナギのときの気持ちが消えてしまうわけじゃない。だからこのちようたちは、たとえ仲間と離ればなれになっても、いつかまた別の場所で出会ったときには、昔のように心を通わせることができる」

ぼくはもう一度、ちようたちのほうを向いた。さっきまで一つの場所に固まっていたちようは、しだいに別々の方向へ飛んでいこうとしていた。

⑫ 「春が来れば、時間が過ぎれば、いろいろなものが変わっていく。でもね、変わらないものもあるんだよ。変わらずに残しておきたいと強く願う気持ちがあれば、想いやきずなはきつと変わらずにそこにあり続けるんだ。それにね」

父さんが言葉を切るのと同時に、春の訪れを告げる強い風が吹いた。風の中で父さんはぼくに向かって、A 微笑

んでみせた。—— そうだ、そう。父さんはこんなふうに、静かに笑う人だった。

春風に乗って、薄紅色の花びらが降ってきた。ぼくは頭上をあおぎ、そして目を丸くした。

そこに、鮮やかなピンク色の天井があった。桜だった。青空を隠してしまうほどの満開の桜が、ぼくと父さんを見下ろしていた。舞い落ちる桜の花びらに交じって、さっきのちようたちが B ぼくの視線の先を横切っていった。

最後に父さんの楽しげなささやき声が聞こえた。

⑭ 「それにね、ずっとサナギのままでいたら、こんなきれいな桜を、見逃してしまうじゃないか」

◆ その言葉は、自然とぼくの口からこぼれ落ちた。ジーエムがはつとした様子でこちらを振り返った。なにかに操られるように、ぼくはさらに続けた、

「別々の中学に進学したら、これまでみたいに毎日会えなくなっちゃうし、放課後だって部活とかでなかなかいっしょに遊べなくなるかもしれないけど……でも、ときどき会えたりしたら、ぼくは今と同じように、ジーエムと話したり遊んだりしたいと思うよ。変わらずに友だちでいたいと思うよ」

自分の気持ちを確かめるように、変わらずにあるようにと願うように、ぼくは C そう言った。

ジーエムはしばし無言で固まっていた。しかし、やがてその口が動いて、ぼくの名前を呼びかけた。

「渚く——」

「当ったり前だ！」

突然背後で大声が響いた。⑮ 瞬間 心臓が止まったかと思った。驚いて後ろを振り向くと、いつからそこにいたのかザッキーが腕組みして立っている。なぜかザッキーは上半身になにも着ていなかった。窓をくぐり抜けるときに引っかかるかなにかして脱いだのかもしれない。そのせいで体の前が物置のほこりでどろどろだった。

ザッキーは言った、

「おまえら二人とも難しく考えすぎ。そんなの当たり前だろ。中学行っても高校行っても変わらない。おれたち三人の友情はッ、永久に不滅だ——ッ！」

宇宙にも届くような大声で、ザッキーは叫んだ。上半身裸で友情とか永久とか叫んでいるザッキーの姿は、普段なら確実に笑えるはずなのに、そのときぼくは笑う代わりに目頭が熱くなった。⑯ ジーエムも笑っていないかった。またぼくらに背を向けていた。泣いているのかもしれない。

「そうだね。ぼくはただ、その言葉が聞きたかっただけなのかもしれないね」

そのうちぼつりと、ジーエムはそう言った。⑯ だったのかもしれないけれど、ぼくにもたしかに聞こえた。

いつの間にか顔を出した月の光が、屋上のぼくたちを照らしていた。

(如月かずさ『サナギの見る夢』による)

*1 ずさん……やり方に誤りが多く、いい加減なこと。

*2 噴飯……ばかばかしさに笑い出すこと。

*3 妄想……ありもしないことを想像して、事実だと信じること。

*4 ザツキー……「渚」と「ジエム」の友人である「岡崎くん」のあだ名。

問一、——線①「こんなところ」とありますが、場所はどこですか。本文中の語句を使って五字以内で答えなさい。

問二、——線②「そんな格好」とありますが、どういう「格好」ですか。本文中から五字でぬき出して答えなさい。

問三、——線③「妙な誤解」とありますが、ここで「ジエム」の言う「誤解」とはどういうことですか。具体的に説明しなさい。

問四、——線④「不覚」の意味を次の(ア)～(エ)の中から選んで記号で答えなさい。

(ア) 目が覚めないこと。

(イ) 愚かではかばかしいこと。

(ウ) なかなか覚えられないこと。

(エ) 油断して、失敗をすること。

問五、——線⑤「ジエムが怒ったように言った」とありますが、この時の「ジエム」の説明として最も適切なものを次の(ア)～(エ)の中から選んで記号で答えなさい。

(ア) 本当の自分の気持ちがばれてしまって、恥ずかしくてどうしようかと思っている。

(イ) 自分の置かれて^{じようきよう}いる状況を察してくれなかったことに対していら立っている。

(ウ) 自分が取り繕^{つくろ}っている様子を見透^{みす}かされたことを情けなく思っている。

(エ) 自分の気持ちを素直^{すなお}に表すことができず、とつさに自分の内面を隠そうとしている。

問六、——線⑥「ジエムは、意外とこういうそが下手だ」とありますが、この表現から「ジエム」は普段どのような人物であると考えられますか。最も適切なものを次の(ア)～(エ)の中から選んで記号で答えなさい。

(ア) 用意周到^{しやうとうとう}でものごとを論理的に考えることが得意で、常に人を追いつめる。

(イ) ものごとを論理的に考えることができ、感情的になることは少ない。

(ウ) 冷静で、常に自分が損だと思うようなことには決して関^かわらない。

(エ) 冷静かつ用意周到で、人を驚かしたりだましたりしている。

問七、⑦に当てはまる体の一部を漢字で答えなさい。

問八、——線⑧「どうにもうまくいかないものだね」とありますが、「ジエム」にとって「うまくいかない」とことはどういうことですか。本文中の語句を用いて答えなさい。

問九、——線⑨「どうにもならないことをどうにかしたくて」とありますが、「どうにもならないこと」の内容が最もよく読み取れる一文を本文中から探し、その最初の五字を答えなさい。

問十、——線⑩「なんともくだらないこと」とはどういうことですか。本文中の語句を用いて二十字以内で答えなさい。

問十一、——線⑪「サナギからちようになれば」とありますが、「サナギからちようにな」とは「渚」にとってどういうことを意味していると考えられますか。次の文の ア・イ に当てはまる言葉をそれぞれ五字以内で答えなさい。

「ア から イ になること。」

問十二、——線⑫「春が来れば、時間が過ぎれば、いろいろなものが変わっていく」とありますが、「春が来れば」が直接かかっている部分はどこですか。次の (ア) (イ) (エ) の中から選んで記号で答えなさい。

(ア) 時間が (イ) 過ぎれば (ウ) いろいろなものが (エ) 変わっていく

問十三、——線⑬「変わらないもの」とありますが、「変わらないもの」とは「渚」にとって何であると考えられますか。本文中から五字でぬき出して答えなさい。

問十四、A・B・C に当てはまる言葉をそれぞれ次の (ア) (イ) (エ) の中から選んで記号で答えなさい。

(ア) ゆっくりと (イ) ひらひらと (ウ) ぽつりと (エ) ふわりと

問十五、——線⑭「ずっとサナギのままでしたら、こんなきれいな桜を、見逃してしまうじゃないか」とありますが、ここには「父さん」のどういう気持ちが表れていると考えられますか。最も適切なものを次の (ア) (イ) (エ) の中から選んで記号で答えなさい。

(ア) サナギからちように成長するという大きな変化の後には、すばらしい世界が広がっているから、変わることを怖がらずに成長してほしい。

(イ) サナギからちように成長するという大きな変化の後には、今までとは全く違った経験ばかりだから、少し危険でも勇気を持って挑戦してほしい。

(ウ) サナギからちように成長するという大きな変化を受け入れるためには、大きな力が必要だから、サナギの時期にしっかりと力を蓄えてほしい。

(エ) サナギからちように成長するという大きな変化の時に大切なことは、夢見る力であるから、サナギの間にしっかりと夢を見てほしい。

問十六、——線⑮「ぼくは笑う代わりに目頭が熱くなった」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちを本文中の語句を用いて説明しなさい。

問十七、⑮ に当てはまる言葉を本文中からぬき出して答えなさい。

問十八、「父さん」との思い出が描かれている場面の特徴として適切ではないものを次の(ア)～(エ)の中から選んで記号で答えなさい。

- (ア)「魔法の合図」によって、「菜の花のつぼみ」がふくらみ花が咲き始めるなど、現実には起こりえない現象を幻想的に描くことによって、「父さん」がもうこの世には存在しない人であるということを印象づけている。
- (イ)「魔法の合図」によって、「菜の花のつぼみ」がふくらみ花が咲き始めるなど、現実には起こりえない現象を幻想的に描くことによって、「父さん」が不思議さを感じさせる一面を持っていたことを印象づけている。
- (ウ)「強い風」や「鮮やかなピンク色」で現実につながりをもたせ、幻想的な世界を「父さん」の「魔法の合図」によってくり広げること、「ぼく」は「父さん」の不思議さが苦手だったことを強調させている。
- (エ)「強い風」や「鮮やかなピンク色」で現実につながりをもたせ、幻想的な世界を「父さん」の「魔法の合図」によってくり広げること、「父さん」との思い出の場面であるということを強調させている。

問十九、次の文は本文中からぬいたものです。どこに入れるのが最も適切ですか。その直後の五字を答えなさい。

「――なにもかも、変わっちゃうわけじゃないよ」

二、次の①～⑤の熟語と同じ組み立てになっている熟語を、次のア～エの中からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

- ①道路 「ア、強弱 イ、残雪 ウ、鋼鉄 エ、読書 オ、国有」
- ②縦横 「ア、閉会 イ、往復 ウ、入試 エ、日照 オ、早春」
- ③国旗 「ア、納税 イ、暗黒 ウ、門前 エ、年長 オ、緑化」
- ④帰国 「ア、修学 イ、善行 ウ、公立 エ、永久 オ、続々」
- ⑤人造 「ア、無力 イ、希望 ウ、高校 エ、自他 オ、気絶」

三、次の①～⑤の文の主語と述語の関係と同じ関係である文を、次のア～エの中からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

(同じ記号はくり返し使うことができます。)

- ①わたしたちの町では人口が減り続けている。
- ②毎日いそがしく働く父に自由な時間はない。
- ③帽子をかぶった背の高い男がわたしの兄だ。
- ④新しく建てた兄の家は風通しがよく明るい。
- ⑤練習したとおりに妹は歌い始めるでしょう。

ア、町は静かだ。

イ、電車が走る。

ウ、工場がある。

エ、あれは海だ。

四、次の①～⑦の——線部を漢字に改め、⑧～⑩の——線部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 心臓は大切なキカンである。 ② 目的地までのシヨヨウ時間。 ③ 問題をホリユウする。
- ④ 資格をシュトクする。 ⑤ 爆発のチヨウコウがある。 ⑥ ハイカツリヨウを測る。
- ⑦ シキユウご返事ください。 ⑧ 街路樹のある通り。 ⑨ 君の目は節穴か。
- ⑩ 署名運動を行う。

平成二十二年 度

中 学 校

国語解答用紙（一回）

明・中 回

総
点

一、

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

ア

イ

問十二

問十三

問十四

A

B

C

問十五

問十六

問十七

問十八

問十九

二、
三、
四、

①
②
③
④
⑤

①
②
③
④
⑤

⑥	①
⑦	②
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤

受験番号
氏名